



ホア ピン (平和)

HOA BINH LE レポート

JVPF 内閣府認証 特定非営利活動法人 日本ベトナム平和友好連絡会議(日越友好連)
NPO Japan Vietnam Peace and Friendship Promotion Council

〒162-0801 東京都新宿区山吹町333番地 辻ビル405 TEL 03-3268-4387 FAX 03-3268-6079
c/o. IFCC.#405, TsujiBLD, 333, Yamabuki-cho, shinjuku-ku, Tokyo, Japan TEL(81)3-3268-4387/FAX(81)3-3268-6079
http://ifcc1985.com info@ifcc1985.com



会費/正会員:(個人)5,000円(団体)50,000円 口座名/日本ベトナム平和友好連絡会議
◎郵便振替 00110-2-188872 ◎三菱東京UFJ銀行・江戸川橋支店(普通)1215225
◎ゆうちょ銀行・〇一九(ゼロイチキュー)店(当座)0188872

新年を迎えて

JVPF 副理事長 鎌田篤則

二〇一三年の年頭にあたり、皆様の御健勝を祈念致します。

JVPFは日越友好交流を手掛けて今年で一三年目の年を迎えます。いろいろの友好交流を手掛けてきましたが、私どもの原点となっているのはベトナム戦争・枯れ葉剤爆弾被害者支援の活動でした。

今また、どうしても触れざるをえません。

枯れ葉剤爆弾投下開始から五二年の今、ベトナムの経済的社会的発展に伴いベトナム国内は人の流動が活性化しています。それは枯れ葉剤爆弾という不発弾を抱えた人々の全体化も意味します。健常者の親から生まれた子どもであってその体内でいつ爆発するか。それが枯れ葉剤爆弾です。

米軍が残した二八箇所のホット・スポットは未だそのままだといわれています。

—— どうしてそんなに悲しい顔をしているの？

—— 戦争は終わった…もう終わったんだよ

—— いえ、戦争は終わっていません…

それはまだ

私達の身体の中で続いているのです

—— いつになったら戦争は終わるの？

私達の身体の中で続く戦争は……

こんな姿で生まれてきたのは

悲しいけれども、でも……

それでも私は生きてゆく

※枯れ葉剤被害者追跡記録DVD『それでも私は生きてゆく』(二〇〇八年JVPF製作、取材・構成…鈴木伊織)より

だから、フクシマの原発事故による放射能被害から目を逸らすことができません。

「福島県民健康管理調査」(二〇一二年四月二六日発表分、〇一八歳対象、三八一一人、平均年齢二〇歳)で三五%に甲状腺のう胞が発見されたといわれます。

ドキュメンタリー映画『ニッポンの嘘』で福島の高橋女子高生が「わたしたちはもう子どもが産めないかも」と慟哭していました。

だから、また教えられました。

二〇一三年一月



写真：ニンビンの古都ホアルーの祠で。いけばな交流の様。 (2012.11.30)

ベトナムアンサンブルの取り組み

二〇一二秋のコンサートは、西日本を中心に十五会場（福岡市、日向市、南さつま市、宮崎市、別府市、宇城市、広島市、大阪市、松山市、さぬき市、高知市、東広島市、さいたま市、藤沢市、東京・文京区）、友情公演二会場（福岡・原西小学校、東広島・西条中学校）で開催されました。紙上を借りて御礼申し上げます。

熊本・宇城 月一回の実行委員会 五〇〇人の来場者

今回の熊本での公演は、宇城市での開催となり、七月に実行委員会を立ち上げ、取り組みを始めました。宇城地区での開催は、二〇〇三年以来九年ぶりとなり、まず実行委員会のメンバーをどうするかということで大変苦労しました。そこで、できるだけ多くの方に参加していただきたいという思いで、労働組合（連合地協など）だけでなく、文化協会、地域づくり団体、企業、行政、議員など幅広いメンバー構成で結成しました。



月に一回程度、実行委員会を開催し協議を行ってきまして、その中では、まず今回の公演の意義がベトナム戦争の枯葉剤被

害者支援と友好交流にあるということをはっきりと分かっていただきながら、多くの方に会場に来ていただくことと、財政的なことでの協力券の金額の協議、子どもたちにもできるだけ参加いただきたいということなど、実行委員から多くの意見を出してもらい、和気あいあいと取り組みを進めてきました。

一番大事な協力券の販売については、今回は年代、職業、地域もそれぞれ違う人たちが動いてくれたことにより、事務局の予想よりも多くの数を販売していただき、大変感謝しているところです。その結果、当日会場には約五〇〇人の方が来場され、すばらしい演奏、踊りなどに感動をされておられました。

今回の公演は、取り組んで大変良かったと、後日総括会議でも皆さんが言われており、ベトナムとの友好が参加者の中では深まったのではないのでしょうか。この取り組みは、今後も何らかの形で継続していかなければならないと感じているところです。

（熊本宇城公演実行委員会 事務局 村上雅宣）

松山 枯れ葉剤被害パネル展、DVD上映会、事前学習会として本番へ

今回の公演にあたって社民党愛媛県連合から呼びかけがあり、連合愛媛中予・今治地域協議会、愛媛県平和運動センター、社民党、I女性会議の五団体で実行委員会を結成し準備を進めてきました。（準備会一回、実行委員会五回開催）

この間、毎年、原水爆禁止松山協議会が松山コミニティセンターにおいて、「原爆写真展」を開催しておりますが、その写真展にも「枯れ葉剤被害パネル」を展示し、市民の皆さんに見ていただくとともに、公演の宣伝も行いました。

また、九月一九日には、約四〇名の参加のもと事前学習会も開催し、ベトナムへ何度となく訪問している宮野英世さんを講師に迎え、「ベトナムのお話」を聞き、DVD「それでも私は生きてゆく」の上映をし、ベトナム戦争、枯れ葉剤等の予備知識を得ることができました。

第一回実行委員会では、私たち素人集団が取組むことですから、果たして協力券が売れるのか、売れても公演当日来てくれるのか、広告団体が取れるのか等々心配は絶えませんでした。

実行委員会の皆さんのご協力により、広告と協力券頒布も、なんとか目標枚数を達成することができました。問題は公演当日果たして来場していたかどうかどうにか心配でした。

結果、公演は約三五〇名の来場者があり成功裏に終了しました。

参加者からは民族楽器の音色に感動した、グエン・テ・ビンさんのギター、ハ

ーモニカ演奏には涙を流れた、ほんとうにすばらしい演奏会だった、というご意見を沢山いただき、胸をなでおろしたところです。

終了後、団員とベトナムから留学にきている学生達一〇名余、そして実行委員で交流会も開催することができました。留学生たちは同胞の皆さんに会えたこと到大変感激し喜んでいました。

（実行委員長 松本修次・愛媛県平和運動センター議長）

宮崎 県内二会場で。 「動かなければ課題も解決しない」

二〇一二コンサートは宮崎市と日向市で開催しました。入場者は宮崎市が約三五〇人、日向市が二五〇人と、まあまあでした。入場者の評判は良好で、ギター演奏に「感動した」、「涙が止まらなかった」との言葉もいただきました。ホッとしているところです。

宮崎の取り組みは、当初は各地区（当時の総評の県内組織）が独自に取り組んでいましたが、ここ数年はJVPF宮崎支部（会員数一〇人）が窓口となり、開催地を決定、会場を仮予約、その上で開催地の地区労会議（旧総評系の各地区組織）の委員長・事務局長にお願いし、出向き了解をいただいています。この中で最大の課題は、協力券（二千元）の頒布です。地区労会議は財政が厳しく余裕がありません。そこで実行委員会は加盟労組に対して組合員数に応じて協力券を割り当てる方法をとっています。これに一般販売分を加えて収支トントンの状況です。

入場者数については、二〇〇人は超え

ないと出演者の皆さんに申し訳ありません。なんとか格好はとれていますが、宮崎市の場合は労組組合員の参加が少なく、協力券の割り当て数とはかなりの開きがあるように思えます。計算上は五〇〇人を超えることになりましたので、この点、知恵が必要と考えます。

二年に一度の同地区での開催は、協力券の販売面（経費負担）からも苦しいというのが率直なところですが、動かなければ課題も解決しませんので、みんなと知恵を出し合いながら、ベトナムとの繋がりを強めてまいります。

二年後の開催に向けては、地元の演奏家との協力も検討しつつ、頑張っています。

（JVPF宮崎支部 川畑 匡）

藤沢 神奈川

これまでにない反響があった

藤沢公演は、四回目となりますが、今回回はこれまでの公演になかった大きな反響がありました。私自身成功だったと満足した反面、それならばもっと多くの人に観てほしかったなどの想いも深く出て、集客の努力が不十分だったと大いに反省しているところです。

結果的には観客数は私の後援会含めて二二〇人程でした。

具体的に実施した宣伝活動は、市役所内を中心に配布している「社会新報」にチラシを同封、実行委員会による関係団体への呼び掛け、ベトナム料理店への案内、インターネット上への公演案内、商業新聞（毎日新聞）での記事配信等でした。

市内のベトナム料理店を三軒ほど探し



だし、ポスター掲示を依頼するとともに公演への参加を呼び掛けたところ、三軒とも複数の人たちが観に来てくれました。毎日新聞が取り上げたのは、「過去の戦争を風化させないとの想いが込められている公演目的を受けとめた」との理由によりでした。

その結果、東京や伊豆七島の島など、市外、遠方から来た人もありました。また、新聞配信による影響のあり、多数の問い合わせもありました。

公演を観ての感想として寄せられたのは、もう一度見たいので次の公演先を教えて欲しいとか、会に入れて欲しいという人もいました。とても良かったと感じの言葉を何人もの人からいただきました。演奏では一弦琴や石琴、そして隻腕のギター演奏者グエン・テ・ビンの演奏が観客を魅了しました。

観ていただけたら、皆様必ず感激するのは必至だと解りましたので、どうしても多くの人に足を運んでもらえるか、様々な角度から検討をしなければならないうとつくづく思っているところです。他の公演先で何か良い知恵があったら教えて欲しいです。

（藤沢公演実行委員長 高橋八一）

活動いろいろ（短信）

●高校生を前に

枯れ葉剤爆弾被害者支援活動を語る

『枯れ葉剤に遭った子どもたち』の著者である細谷久美子さんと鎌田篤則・副理事長は、相模原総合高校で高校生達に枯れ葉剤爆弾被害者支援の一七年間について語りました（二〇一二年七月四日）。これはJVPF理事で同校教師の永瀬一哉さんの要請で実現したもの。授業ではDVD『それでもわたしは生きてゆく』のイントロも上映。学生たちは相模原がかつてベトナム戦争の時の米軍の武器補給廠としてベトナム戦争の後方基地として存在していたことも永瀬先生から知らされ、自分達の地元の歴史と今なお続く戦争後遺症の状態について意見交換しました。

（付）ジャングルに隠れたポル・ポト秘密司令部をカンボジアで踏査した記録『クメール・ルージュの跡を追う』（同時代社刊）は理事・永瀬一哉先生の著書です。一読して下さい。

●小学校でベトナム紹介授業

一〇月、上学年を対象にベトナムの国についてたくさんさんの写真を見せ、①場所②気候③時差④言語⑤通貨⑥街の様子⑦学校生活の様子を伝えました。学校生活の様子は奨学金を通して知り合ったナムさんに教えてもらい紹介。児童は日本と

の違いに驚いていました。

この第一回の話の後、六年生からベトナム戦争の被害についてもっと知りたいとの要望があり、一二月に第二回を実施。戦争の被害は今なお続いていることを伝え、タイピンでのリハビリの様子などを話しました。最後にDVD「それでも私は生きていく」を視聴。児童は真剣な眼差しで見っていました。

児童の感想より「枯れ葉剤を浴びて病気になるってしまった人々は何も罪がないのにかわいそうだと思いました。でも、病気で一生懸命生きていることがわかりました。私たちは被害をうけた人々の苦しみも考えながら生きなければいけないと思いました。」

（静岡・神馬道子）

●明治大学マンドリン倶楽部・ハノイ友好公演開催される

二〇一二年九月一五日（土）ベトナムの首都ハノイにおいて、同友好演奏会がAUCCOホールで開催され大好評を博しました。当日は政府要人ら六〇〇人が鑑賞。甲斐靖文常任指揮者をはじめ、ゲストにテノール歌手・角田和弘氏を迎え、演奏はオーケストラ構成（総勢四一人）。参加学生は滞在中、枯れ葉剤被害者施設や全盲学校なども慰問しました。

これは、四年前のホーチミン市での友好演奏会に続き、マンドリン倶楽部創部九〇周年を記念して開催されたもの。



JVPF
はハノイ支
部とともに
二年がかり
でこの演奏
会をサポート、開催成
功に協力し
ました。

●中村梧郎写真展 「枯葉剤とベトナム」

昨年七月から準備し、実行委員会主催で開催した中村梧郎写真展「枯葉剤とベトナム」(十一月六日～十一月八日

於 川越市立美術館市民ギャラリー)は二四六四名の入場者を得て終了しました。改めてベトナムのダイオキシンの被害の実態を知り、「涙が止まらない」「胸が痛む」「アメリカはむごい事をした」と多くの人が語り、感想文も沢山寄せられました。

一九六一年から一〇年間、アメリカ軍が撒いた枯葉剤による被害者は第三世代(孫)にまで現出し、遺伝子破壊の連鎖は深刻です。三〇年以上にわたり追跡取材をつづけてきた中村梧郎氏の写真は、アメリカに対する鋭い批判と、犠牲となつたベトナム人民への温かい視線に溢れています。

十一月一日に開催したギャラリーートーク(川越市立博物館視聴覚ホール)は鎌田ツエツトさんとグエン・トゥイ・ズ

オンさんのあいさつで盛り上がり、中村氏のトークもあつたという間の二時間余でした。駐車場が満車で入場出来ずに帰られた方々には申し訳ないことをしました。

埼玉在住の中村氏の県内最初の写真展を「川越市制九〇周年記念事業」と位置づけ大きな支援を戴きました川越市に感謝し、メッセージを下さつた上田清司埼玉県知事・村山富市JVPF会長、ご協力頂いた日中友好協会埼玉西部支部・埼玉JVPF・久保研究所・個人有志・そして連日会場に詰めて来場者と交流された中村梧郎氏にお礼を申し上げます。(平松伴子)

●二年度日越いけばな交流が開催

協力いただいている州村衛香先生によつて「二日越いけばな交流」が、ニンビン省(二〇一二年一月三〇日)、ハノイ市(二月二日)で開催されました。ニンビンでは古都ホアルーのお寺の境内で開催、ハノイ市ではハノイ市女性企業家協会の協力で開催されました。昨年は実現できませんでした。二〇〇八年以来、通算で四回目となりました。いずれも好評を博し、今後の活動につながると思われまふ。

●奨学生の故郷を訪ねました

私の奨学生ホンさんは、二〇〇八年に高校を卒業後ハノイ国家大学に合格。この九月から大学四年生になりました。私たちは年に数回ですが連絡を取りあい、



毎年会ってきました。そして今年の夏、念願かなつて故郷訪問が実現しました。一緒に奨学金活動に参加していた三枝さ

んの奨学生ティエンさんの家にも行きました。彼女は小学校教師になり、結婚して彼の家の近くに住んでいたのです。どんな地域なのかと胸をわくわくさせながら行った彼の家は、バビの山の目の前に見え、とても素晴らしい所でした。近所に住む祖母の家も訪問。一二年前、釘を一本も使わずに建てられたという家に歴史を感じました。彼の家では家庭的な昼食を用意してくれていて、みんなで一緒にいただきました。最後に彼の通っていた小学校も訪問。ここからもバビの山が美しく見えました。念願だった故郷訪問が実現し、感動の日となりました。(神馬道子)

●ベトナムの友人の結婚式

福井大学留学が縁で友好を続け、このほど郷里ダナンに建設した日本企業に就職が決まり、同時に新婦となつたウインサーさんの結婚式に招待された。

興味津々のベトナム結婚式は、そのシンブルさと絆を大切にする作風に感動した。北部の新郎と中部の新婦では習慣も



左端が宮崎さん

違うこと、汽車で一二時間の距離にあり、両親は前日まで大変な気苦労を強いられたよう

だ。式は新婦の自宅で、両親が揃ってセレモニーが挙行され、披露宴はレストランで六〇〇人が参列し驚かされた。ステージは新郎新婦と両家の両親の六人だけで、宴会中は各テーブルの挨拶廻りに忙しく、食事のみの簡素さに感銘をうけた。

新婦の両親とともに教師で大半が関係者のなか、わたしは日本での親代わりとしてテーブルスピーチを行う。妻は桜をイメージした着物姿で開場を大いに沸かす。JVPFを通じて依頼した現地ガイドの手助けで楽しい思い出となった。その一週間後に北部の新郎側で再び結婚式が挙げられたようだ。

(福井・宮崎勇雄)

●産学官民交流の シンポジウムを開催

九月二七日、在大阪ベトナム総領事、レ・クオク・ティーン総領事を迎え、「成長するベトナム経済の可能性と東広島へ広めよう」と題する「広島・ベトナム2012シンポジウム」を開催しました。総領事の基調講演を受け、東広島商工会議所・奥本副会頭、海外協力隊経験者の



右端が赤木さん

持田さん、ベトナム・ホーチミン国家大学講師で広留学生のエインさん、ティン総領事のパネリストによるディスカッションを行いました。

地元産業

界、広島大学、広島国際大学、近畿大学工学部など学術界、行政や議会、一般市民など一三〇名あまりが集い、ベトナムとの交流の現状および問題点、今後の交流促進に向けた課題について共有を図ることができました。

特に、あらゆる交流のベースとなる相互理解と語学力アップにつながる留学生や研修生の受け入れなど、学術・産業分野における交流促進が重要であり、HVPFが取り組んでいる奨学支援活動などの連携の必要性が共有できたことは大きな成果です。

この成果をもとに、「日本ベトナム国交樹立周年」を迎える今年、各界と共に四〇「記念訪問団」派遣を検討しています。

（広島ベトナム平和友好協会専務理事 赤木達男）

● パービー県の奨学生、

リンさんの故郷を訪問しました

昨年の九月一八日から二九日までベトナムを訪問しました。まず、今年まで就



ました。

リンさんは私が最初に就学支援し、今でも交流が続いている「ハタイ・パービー県少数民族出身高校生奨学生支援」の二二歳の女性です。彼女は卒業後、専門学校を経て故郷で保母をしながら家の農業を手伝っています。彼女の故郷はバスの終着地からタクシーに乗り継ぎハノイから二時間程のところです。

一泊二日の訪問で食材豊かな食事・郷土菓子作り・鎮守の森の散策・公園までの遠出など家族ぐるみの心からの歓迎を受けました。

親戚の方々も一言挨拶したいと多くの方が訪ねてきて、古き良きコミュニティが生きていました。

帰り際のおじいさんのお別れの言葉は「これからはリンだけでなく、家族や地域とも友好を深めてほしい。」でした。これこそ私が望んでいた支援の広がりと共感し、再度の訪問を約束して帰途につきました。

（鹿児島・山下順子）

● ベトナム農民組合が視察で来日

JVPFはベトナム農民組合（Vietnam Farmers Union）の日本の有機農業視察をサポートしました。視察団はハ・フック・ミチ第一副会長ら六人は、二〇二二年一月一二日、今西正行・元兵庫県議会議員、北川れん子・元衆議院議員も同行し、丹波の橋本慎司さん宅を訪問し、有機農業の事情について意見交換しました。



お世話になった橋本さん

換と農場視察をしました。ベトナムでは今、食の安全が社会的な問題になっており、熱心な視察となりました。橋本さんはNPO兵庫県有機農業研究会副理事で国際交流にも熱心でDVDなども使用して丁寧な報告をしていただきました。

● 村山学校卒業生が

日本研修で来日

二〇二二年九月三〇日、今年度の村山日本語学校修了高校生（現、大学進学生など）ら六人が日本を訪問。北海道で農業体験し、これまでの村山学校での学習成果を検証するとともに、日本の生活文化を学びました。

村山記念JVPF日本語学校

日本語修学高校生育英奨励金の追加募集とお願い

新三カ年計画として二〇一〇年から日本語修学高校生への奨励金支援を実施してきましたが、今年度（二〇二二年九月～二〇二三年八月）が最終年度となりました。

現在高校生・青年団奨学生一四人が修学中です。二〇二二年は大学留學生実現までいきませんでした。日本語学校への留学や在ベトナムの大学日本語科への進学など、少しですが役割を果たすことが出来ました。

今年度が「新三カ年計画」の最終年度となります。皆様の新規協賛をお願いします。（同封資料参照）



13ベトナム民族アンサンブル・チャリティーコンサート開催地募集

今年は、東日本を中心（東北・北信越・関東・東海）に、一〇月九日～一〇月二八日で計画中です。

昨年はフクシマ原発放射能被害もあってか枯れ葉被害への関心が高くなりました。今年の開催地は、未だ予定に達していません。開催への御協力をお待ちしております。

クアンナム

さいたまJVPFが
中部クアンナム省で枯れ
葉剤被害者を調査慰問、
医療器具贈呈も行う

さいたまJVPF一行一〇人は二〇一二年八月二日からベトナム中部クアンナム省を訪問、三件の被害者家庭慰問を実施しました。内一件は昨年平松伴子さん（さいたまJVPF副会長、『世界を動かした女性―グエン・ティ・ビン』著者）らの寄付金で家が建けられていました。

二〇一二年は枯れ葉剤爆弾投下開始から五一年、いまなお「不発弾がベトナム国民の体内に坐りつづけています」。

抜粋は今回の訪問団に参加された詩人で出版社コールサック代表の鈴木比佐雄さんの了解のもと『コールサック73号』より要旨を転載させていただきます。

鈴木比佐雄

まず「山岳地帯の村」を訪問し、平松さんが中心となって川越市の病院から戴いた医療器具を寄贈して、その医療機関



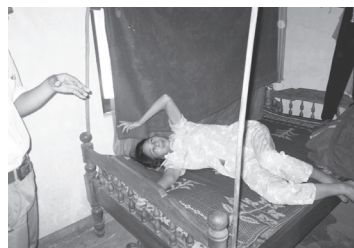
贈呈した医療器具を、
医療センターの
スタッフが
確認する様子

の現状を聞き、何が今後支援できるかを話し合った。その後、二人の枯れ葉剤被害者の家庭を尋ねた。

に横たわっていた。受け答えは出来るのがで正常な精神状態ではあった。しかし二〇代半ばから脳に異変が現れて、激痛が走り寝たきり状態になったという。話している最中にも、発作が起きてベッドの手すりに手を握り身体を突っ張り、身体を反転させてのた打ち回り始めたので、聞き取り調査は中止された。農民である母親は上の娘は何ともないが、下の娘がこのようになってしまい、公的な支援と隣の親類のおかげで暮らしていることを淡々と語った。

老いた母親の脇には親類の美しい少女が手を握り、老婆を守るように立ちすくんでいた。私は

サイさんも枯れ葉剤がなければ激痛の人生ではな



い、この少女のような未来があったはずだったと感じられて心が痛んだ。

DUY XUYEN 県 DUY PHUOC 区
フー・バン・クオン（男）40歳

次に昨年の参加者と埼玉JVPFが支援した六〇〇〇ドルの中から四〇〇〇ドルの予算で建てられた枯れ葉剤被害者のフー・バン・クオンさんの家を訪ねた。ベトナムでは一般的な赤煉瓦の家には、玄関の両開きドアと窓がはめ込まれていないで、いまだ未完成だった。家のプレートのには、埼玉JVPFの支援によって建てられた「仁愛の家」と記されてあった。私たちのささやかな支援を「仁愛」という深い言葉で記録してくれたベトナムの関係者の思いがとても嬉しく感じられた。クオンさんは私たちの援助の他に親戚などから資金を借りたがまだ全てをまかないきれないので、これから働いてドアや窓を購入する予定だということだ。そのことを話す彼は、古い家を新しく



前列左から3人目がクオンさん。そしてお姉さん。訪問団とともに。

したことで、何か希望に満ち溢れていた表情をした。支援された四〇歳の男性のクオンさんは枯れ葉剤被害者二世で、両親が農

民で枯れ葉剤の影響からか、両足が歩く際に曲ってしまい転びやすい。身長も成人男性よりは低く、成長が止まっているようだ。しかクオンさんにはこ



入口にJVPF埼玉
寄贈が掲載

やかな笑顔で私たちを迎えてくれた。聡明そうな表情で家を作る資金を援助してくれた感謝の言葉を語ってくれた。一時はハノイの縫製工場でサンプル商品を工業用ミシンで作っていた職人だった。今も近所の人に頼まれてオーダーメイドのワイシャツを作っているという。両親は亡くなり姉と二人家族だ。姉は独身で米を年に二回ほど収穫して生計を立てているそう。その米は自分たちが食べるだけで販売する余裕はないという。父母亡き後、姉の農作業と公的な支援とクオンさんの裁縫の手間賃でようやく暮らしが維持できていることが分かる。私は枯れ葉剤を撒いたアメリカに対してどう思うかとクオンさんに尋ねると、顔を歪ませて怒りを感じると答えた。その言い知れぬ苦痛に満ちた感情を私は決して忘れることはないだろう。またどのような服を作っているのかと質問すると、家の奥に入って行き、まだボタンを付けていない作りかけのワイシャツを持ってきた。皆で回しながらその縫製のしつかりした出来ばえを誉め合った。私たちは彼から一人の人間として生きていくプライドを垣間見せられて、素直に感動した。家は二階建てでレンガ造りの階段も見える。この地区は洪水が年に数回起こり、水浸し

になるという、その時に大事なものを持
って二階に逃げるのだという。古い家は
平屋だったので、新しい二階建ての家は
彼の財産、生命を守る希望の家であるこ
とが理解できた。団長の大石さんたちは
急きょ相談し今年の支援金の中から五〇
〇ドルをクオンさんに寄贈することを決
めて参加者の前で伝えた。彼は参加者た
ちと握手をして分かれる時に手を振り続
けていた。

DUY XUYEN 県 DUY HOA 区

レイ・ダク・マイン (33歳)

次に訪問した三三歳の男性レイ・ダク
さんは、耳が正常の人よりも半分ぐらい
しか聞こえずに、補聴器をしていた。亡



右側がマイン

くなった父
は軍人で枯
葉剤を浴び
癌で亡くな
ったとい
う。左手に
力がなく、
全身にかゆ

みがあるという。村の中で店を開いてお
菓子やドリンク類を販売している。妻と
二人の子がいて、二人とも病気がちで特
に四歳の息子に枯葉剤の症状がこれから
出てこないか、妻が心配そうに語ってい
た。高齢の母は、息子の耳となって販売
を手伝っているようだ。彼は元気がなく
憂い顔で何か生きているのがやっとのよ
うな印象を受けた。私たちは彼を疲れさ
すことをためらってあまり質問をせずに
帰ることにした。私はドリンクとお菓子
を買いたいと思い、お婆さんに値段を確
認しお金を渡すと、七歳の娘はお釣りを
もらって持ってきてくれた。彼の店が繁
盛することを祈った。昨年に訪問した枯
葉剤被害者の家庭はどちらも寝たきりの
一〇代、四〇代の子供を抱えた家庭だっ
た。今年の三家族は、三〇代、五〇代の
意識は正常だったが、生涯にわたって誰
かの手助けがなければ、生きていくこと
は不可能だった。これだけを見ても枯葉
剤被害者の症状は多様であり、今も世代
を超えて続いている恐るべき実態が明ら
かになってきた。

タイビン

後遺症の苦しみは今なお続く、

タイビンボランティア訪問団へ

新潟 齋藤由宣

タイビン省枯葉剤被害者協会

(VAVA) を訪問

タイビン・ボランティアに参加をして、
その中で枯葉剤被害者団体協会 (VAVA
A) を訪問しました。タイビン市の繁華
街の小路に位置し、玄関先には、日本か

らの寄付と思われる救急車 (日本外交協
会の印字あり) が一台停めてありました
が、まだナンバープレートは付いていま
せんでした。今回の訪問団は七人。

会長 (NGUYEN DUC HANH) 及び
副会長 (HO SY HAI) から協会と併設
されている施設等について説明をしてい



右から、ハイ副会長、ハン会長

いただきました。

①協会は政府
の補助金と民間
団体からの寄付
金で運営されて
おり、約一五〇
万ドルの基金を
有しているとの
こと。会員は二
一、〇〇〇人。
ただし枯葉剤に
よる被害者数は
三二、〇〇〇人。
うち兵士として
被害を受けた者
は二四、〇〇〇
人、二世三代三

代は八、〇〇〇人、四世代は一人。(こ
のボランティア活動に参加している間に
二件目の事例が発生) また、二〇、〇〇
〇人は政府から補償金を受けています
が、四、〇〇〇人は申請中とのこと。

②タイビン市 (ハノイから車で三時間
ほどのところ・ベトナム北部) はベト
ナム戦争時において多くの兵士を出し、
ベトナム中南部地域での戦争に参加、結
果、アメリカ軍による枯葉剤 (ダイオキ
シン) 散布による被害者となったもので、
ベトナムで最も多くの枯葉剤による被害
者を出した地域の一つである。

副会長ホー・シー・ハイさん (五九歳)
の二人の子供さんも被害者 (二世代) で
あり、一人の子供さんは既に死亡してお
り、もう一人の子供さんはリハビリに励
んでいるとのことであった。会長、副会長
は無報酬のボランティアで活動している。

③協会では、枯葉剤による被害につい
て、アメリカ政府及びアメリカの薬剤会
社を相手に被害による訴訟を二〇〇四年
に起こしていたが、〇九年に米連邦最高
裁で棄却された。引き続き訴えていくと
のこと。

④協会の活動の一つとして、今まで被
害者の家三〇〇棟の補修をしたこと。そ
こにはアメリカの薬剤会社からの寄付金
(支援金) もありましたが、副会長がア
メリカにわたり自転車で各地を回り、キ
ャンペーンを実施し、枯葉剤の被害を訴
えた成果でもある。

⑤併設されているリハビリセンターで
は、三〇〇人が仕事の訓練ということで、
ミシン、刺繍、研磨の作業ができる施設
が設置されていました。

⑥ダイオキシンの「解毒センター」が
昨年開設されました。ここにはすでに四
〇〇人以上の人が利用して効果があつた
と説明がありましたが、細かい数値の検
証などは今後委ねられるものと思われ
ます。漢方薬とサウナの組み合わせで一
か月間の期間集中的に治療するとのこ
と。

以上大雑把な報告ですが、今一番重要
なことは、アメリカ政府及び薬剤会社は
自分たちの非を認め、一刻も早く被害者
に保障をすることだと思っています。

また、今年からようやくアメリカ政
府はダナン国際空港近辺 (ホットスポッ
ト) のダイオキシン汚染除去作業を開始
するとのことですが、ベトナム全域の調
査も早期に実施することも重要と思われ
ます。

陰しい顔が笑顔に

枯葉剤被害者の家庭訪問

枯葉剤被害者の家庭訪問で、ファイ・マー・トイさんの自宅を訪れました。家族はトイさん（六七歳）と、奥さん（六二歳）、長女のマイティさん（三五歳）の三人家族。



長女と両親

トイさんは六四年から七五年までラオス、カンボジア、そしてベトナム南部解放まで戦争に参加をしていました。そして、米軍の枯葉剤散布により、ダイオキ

シンに汚染されました。七九年から九〇年まで軍で勤務、今は退職。

VAVA被害者団体協会の「解毒センター」で治療をしたそうで、気分がすぐれたといい、現在も漢方薬を飲んでいる。奥さんは戦争に参加しなかったため、枯葉剤による被害からは逃れられました。

三人のお子さんを儲けられましたが、次女の方は七歳で死亡。身体発達障害、



7歳で死んだ次女

盲目、巨頭症、七歳で七kg。三女の方は、〇八年大

学合格、一〇年の大学二年

生の時、発熱



大学2年で死んだ三女

し肺炎で死亡。子供の時から関節炎に悩まされ、胃にも何らかの障害があった。

長女のマイテ

イさんは精神機能不全、話ができない、癲癇があり発作が二日間で一回ほど出る。一日中家の中で過ごしている。

トイさんとマイティさんは枯葉剤の被害者ということで、政府から補助金が支給されている。トイさんは月一四〇万ドン（五〇〇〇円強）、マイティさんは一〇万ドン（四〇〇〇円程）。トイさんは言わば戦争の英雄であり、軍勤務者であるので、一般の人たちより少し恵まれているとありますが、ごく普通の生活をしていると感じられました。

訪問は七人プラス通訳の方を含む三人の一〇人でした。大挙してお邪魔をし、あれこれ聞いた説明を受けたりしたわけですが、当初、マイティさんの表情は硬く、われわれを見る目に怒りがありました。途中精神の安定がなくなり、席から退席しましたが、しばらくたって戻ってきました。だんだんと陰しさが消え、我々が訪問を終わり、車に戻ったときは、マイティさんがわざわざ見送りに家から出てきました。その顔には笑顔がありました。話の内容がだいぶキツイものでしたので、その笑顔で救われた思いでした。

（齋藤由宣）

心と心が通じ合う

タイビン・リハビリ施設で滞在ボランティア

神馬道子

二〇一一年から、タイビンの枯れ葉剤被害者リハビリ施設で再開された滞在ボランティアは、被害者との交流を通じて心のケアとして、大きな意義をもっています。

昨年の八月二〇日と二二日の二日間、タイビンで滞在ボランティアを行いました。今回の内容は次の八つ。

①ラジオガ・・・昨年練習したラジオガを各単位の始まりに実施。心と体をほぐしリラクセス。

②ラフターヨガ・・・一九九五年にインドの医者、マダンカラリアが考えた、笑いとヨガの呼吸法を組み合わせたユニークなエクササイズ。今や世界七〇カ国以上に広がっています。笑いの合言葉「ホハハハ、ホハハハ、ホハハハ、イーイー！」は世界共通。いろいろなポーズでたくさん笑って盛り上がりました。

③タッピングタッチ・・・指先の腹のところを使って、軽く弾ませるように左右交互に優しくたたくことを基本としたシンブルケアの技法。背中、肩、頭などを左右交互にトントントンとやさしくタッチ。自然と心が落ちつきます。

④紙芝居・・・ベトナム語と日本語の両方が書いてある紙芝居「太陽はどこからでるの」を読みかせ。フンさんと竹内さんの二人で協力して読みました。

⑤虹色コマ作り・・・CDとビー玉を使ってコマを作りました。何色に塗るか

さんに挑戦。みんな折り方をじっと見て、一生懸命作りました。

⑦マジック・・・昨年も披露したマジック。失敗もありましたが、昨年も見て種を知っていた人たちは「知っている！知っている！」と大喜び。

⑧一弦琴と盆踊り・・・日本とベトナムの文化交流。日本からは一弦琴でベトナムと日本の歌を演奏。すてきな音色が響きました。ベトナムからは盲目の少女が今年も「バスゴっこ」を披露し透き通った歌声を聴かせてくれました。最後に恒例の盆踊り。ベトナム人は浴衣、日本人も浴衣やアオザイを着ました。昨年踊った「炭坑節」。そして、今年は鹿児島県の「おはら節」も踊りました。みんな



盆踊りの後、全員で

で歌ったり踊ったり、とても楽しい夏祭りのひとときを過ごしました。

今回もたくさん人の活動を通して、互いに気持ちを感ずけ合い、心と心の交流を深めることができました。ぜひ今後も続けていきたいと思っています。

は自由。ひとりひとりの個性があふれ出たすてきなコマができました。

⑥折り紙：三角ぼうし、きつね、紙でつぼう、くま

ベトナム南部（カントー・ベンチェ）で枯れ葉爆弾被害視察

12冬JVPF訪問団

カントー

なにがあっても

戦争は二度としてはならない

香川 堀口美穂

カントー市の状況を

VAVAで聴く

一二月四日、ハノイから空路でカントーへ入った。飛行機を降りたとたん、温かく湿った空気に包まれ、玉の汗が噴き出す感触を覚える。空港では現地で案内や通訳をしてくださるジミーさんが出迎えてくれ、そのままマイクロバスでカントーのVAVAへ向かった。

カントーVAVAでは、チャンキエウ所長から二〇〇六年にVAVAを設立して以降の活動内容や支援した人数・金額などを詳しく説明をしていただいた。私たち訪問団からも質問をして、もっと深く理解できるように補足もしてもらった。

その中で、チャンキエウ所長が「このVAVAも、企業や政府の援助で枯葉剤被害者を複合的に支援するセンター、被害者の家を作りました。ここをぜひ見てください。」と勧めてくださり、急遽、翌日の朝に、その被害者の家を見学させてもらえることにな

った。

被害者施設を慰問

一二月五日、朝七時過ぎに、枯葉剤被害者の家と呼ばれるセンターに到着した。住宅街の中にあり、敷地は約四〇〇㎡、建物は鉄筋コンクリート造かレンガ造の学校のように、草木が植えられた中庭もあり、清潔で明るい印象。このような枯葉剤被害の孤児や障害者の保護・教育を行う複合センターは、カントー州だけで五カ所あるという。年齢別・性別で

ベトナム南部・カントー市の枯れ葉剤爆弾被害状況

【カントー市の概括について】

カントー省は1975年4月30日の解放後から1976年までに「Soc Trang、Can Tho、Hau Giang」の三行政区から成立してきたが、1991年1月に「Soc Tran、Can Tho」の二行政区を持つ形になる。

その後、2004年1月1日、カントー省はHau Giang省とカントー市に分かれ、カントー市は中央政府直轄となる。

一気候は二つの季節にはっきり分かれ、5月から11月まで雨季、12月から4月まで乾季。年間平均温度は27度。一面積は1,389.59平方メートル。

一単位行政は5区4県で、4県は僻地。85の村と町がある。

一カントー市の人口は1253158人。民族はキン族、ハー族、チャム族、コメー族の4つ。カントー市はベトナムの都市で4番目に人口が多く、下流メコン川地方では一番大きい。

【カントーの枯れ葉剤被害者の情報】

1. カントーVAVA（枯れ葉剤被害者協会）は2006年に結成。はじめて今までの参加会員数は3998人
男性は2632人、女性は1366人。
3998人の中には2897人は被害者、他は公務員、退職した人、援助者、一般市民などのボランティア。
2. 推定される枯れ葉剤被害者は3944人
一男性2483人、女性1461人
一16歳以下の被害者471人
一直接被害者2060人
一第二世代被害者は1315人
一第三世代は569人
一従軍被害者数は1799人
一一般国民被害者数は2145人
一自活生活可能者数は2914人
一自活生活不可能者数は1030人
一特別困窮者数は149人

貧困家庭数は48%（被害者数1893人相当）、特別困窮者数は15%で援助が手当が必要（被害者数600人相当）、平均生活者数は33%（月：20万ドン程度＝800円、被害者数1301人相当）、良い暮らしが出来る人は4%（月：70万ドン程度＝2800円、被害者数150人相当）
一般的困ることは生産資金と生産手段・資材が足りないこと。

2012年12月4日カントーVAVA



入所の子どもたち

入所対象者を分けるなどし、そのうち一か所はリハビリセンター機能を持つ。
私達が訪問したこのセンターは、六〇人〜七〇人の子どもが生活できる。入り



施設の前で

口に一番近い場所に平屋建ての幼稚園があった。三〇人ほどの幼児がそろいの服（制服？）で椅子に座りお茶を飲んでいる様子は、子供らしく生き生きとして、私たちが教室を覗き込むと、キラキラし

た表情で手を振り返してくれた。

幼稚園の向こうには、平屋で長屋建ての教室のような建物が中庭を挟んで二棟あった。そこは、年齢別・性別・障害の程度別に子ども達が暮らす部屋になっている。一番手前の部屋に入ると、二、五歳くらいの子どもたちが八人、ひとつのベッドに乗っていた。見た目が元気な子もいるが、手や指がない子、うまく立っていない子もいる。「ここは、障害が軽い、年少者の部屋です。」とセンターの職員が教えてくれる。

センターの職員に話を聞いたり教室の写真を撮ったりしていると、子ども達が抱っこをしてほしいと手を伸ばしてきた。するとすぐに、私たち訪問団のメンバーでベトナム人のツェットさんが、二人の子どもを両脇に抱えあげてあやし始めた。子ども達は、私にも手を伸ばしている。「外国人の私が抱っこしたり話しかけたりしても怖がらないだろうか？」と恐る恐るベッドの一人を抱き上げる。すると、その子は安心した様子。日本語で話しかけてみても嫌がらず、こちらをじっと見つめてくる。

続いて、さらに敷地の奥に進み、三階建ての建物に入る。その建物には、ミルクの香りが漂い、赤ちゃんが生活していた。やはり枯葉剤の被害で、手足が短い子・頭が大きい子・体が小さい子などがベビーベッドに寝ていた。センターの職員の説明では、体に障害がある子だけでなく、一見健康に見えても神経や脳に障害がある子もいるという。しかし、心身の障害のせいで体調が悪そうな赤ちゃんも、丸く大きくキラキラした、好奇心い

っぱいの目で見つめてくる。「みんな人として生まれ、今この時を、一生懸命に生きているんだ。」そう思うと、旅の報告のために撮影しようと思ったカメラのシャッターを切ることができなくなった。※訪問団は施設に五〇〇ドルの寄付を行った。

戦争の被害をたどる旅に参加して思うことは、物的被害だけでなく、被害者の心はどうなっているのかということ。ベトナムの人々は、やさしく思いやりにあふれ、明るく暮らしているように見える

ベンチェ

痛みを共有し理解を深めることが必要

シャッターを押せない

〜枯葉剤被害者宅を訪問〜

鹿児島・村上聖英

二月五日（水）、この日は、早朝からカントーの児童福祉施設に行き、枯葉剤による障害を持つて生まれた子供たちや経済的理由で「捨てられた」子供たちに会い、何とも言えない切ない気持ちになり、しかもその気持ちを整理する間もなく午後からはベンチェの枯葉剤被害者宅に家庭訪問という、肉体的にも精神的にも過酷なスケジュールだった。

カントーから車で走ること約2時間、ベンチェのVAVAを訪れる前に、枯葉剤被害者宅へ。比較的大きな道路沿いにある一軒家にその方々は住んでいました。

が、やはり、内側には癒えない悲しみを抱えているのだろうか。

そして、もう一つ思うことは、同じような被害がもし日本で起きたなら、私たちはどう対応し、どう折り合いをつけていくだろうかということ。しかし、折り合い？そんなもの、いくら時間が経っても付けられないのではないか。よって、最後はいつも「何があっても戦争は二度としてはならない！」と強く念じる。念じながら、これから、戦争をしないために自分でも実行できる「ささやかな何か」を考えて続けている。

枯葉剤による障害を持つ方は、三五歳の女性。お母さんは七〇歳前で健在、お父さんは数年前に七〇歳過ぎで他界。女性には弟二人がおり、それぞれ枯葉剤の障害もなく成長し、すでに独立しているとのこと。

家に入り、部屋に通されると、そこに



はベッドに横たわるひとりの女性の姿があった。

お母さんいわく、お父さんは軍医として

ベトナム戦争に従軍し、その際に枯葉剤に暴露したそうだ。戦争終了後に授かった最初の子供がこの女性で、生まれて数カ月後には異常がわかり、その後ずっと障害を抱えたままの状態とのこと。四肢が変形し指も著しくゆがみ、きちんと言葉を発することもできず、世話をするお母さんが女性の様子を見て女性の感情や要求の判断を行いながら生活をしている。

父親は、ベトナム戦争の従軍医師であったが、二年前にすでに他界していた。彼女の下に二人の兄妹がいるが、幸いにして症状は出ておらず、別の都市で就職しているという。元学校の教師だったという母親は、六八歳となった今、自分が死んだあとのことを思うと不安でたまらないと涙を流しながら話してくれた。政府からの援助は月一〇〇万ドン。母親の年金三〇〇万ドンと合わせても生活するのが精いっぱいという。

鹿児島県南さつま市でベトナムアンサンブルコンサートを行った際にロビーに展示した枯葉剤被害のパネル展示でさえ、その惨状に鬱々とした気分になった私でしたが、ベトナムに訪れて目や耳で実際の被害者を見聞きし話を聞くと、戦争そのものの悲惨さや自分の無力さに強く打ちひしがれてしまった。VAVAおよびJVPFの方々は写真を撮っていい、この事実を日本の皆さんにもしっかりと伝えてほしいと言ったが、デジタルカメラのモニター越しに映るその姿があまりにも気の毒で、シャッターを押す気力さえも奪われてしまい、あまり写真も撮れないほどだった。

原子爆弾と枯葉剤という兵器こそ違えど、日本もベトナムも戦争時の兵器の使用が非戦闘員に大きな被害（後遺症も含め）を受けて未だに辛い思いをしている人がいる国としてもっと痛みを共有し理解を深める必要があると感じた。

幸いにも、ベトナムの経済事情は、サラリーマンの平均給与が月収三万円ほどと言われている。私どもがちょっとしたタバコや清涼飲料水などの嗜好品を数回我慢し我慢し、一人あたり数百円から千数百円の募金を多くの人から集めれば、ベトナムでは大きな支援の原資になるはずだ。

我が国日本は、原発事故による復興対策が不十分なフクシマを抱えているが、それでもあえて、わずかでも支援の矛先をベトナムの戦争被害者たちにも向けていただければ、カントーの児童福祉施設で私の手を握りなかなか離さなかった小さな子供たちや枯葉剤の後遺症に苦しむ人々にも明るい希望を見ることができのではないかと思った。

被害者は二世、三世へ

ベトナム・カンチエVAVAで

鹿児島・堂園力郎

ベトナムに行くきっかけとなったのは、今年一〇月に南さつま市で開催した枯葉剤被害者支援「ベトナムアンサンブル・コンサート」の実行委員として参加したこと。それまで、ベトナム戦争は知っていてもベトナムと言う国の歴史や音楽など考えたこともなく、同時に行ったパネル展で写っていた枯葉剤被害者の子供たちのあまりにも悲惨な写真に言葉を失った。

たのでした。そんな私に県の組織の方が、「友好訪問が二月にあるから行ってくれば」と声をかけてくれたのでした。

二月二日。成田からの直行便でハノイについた一行は、少数民族の児童への就学支援訪問を終え四日には空路で南部のカントー市へ移動。休む間もなくVAVA（枯葉剤爆弾被害者協会）カントー支部を訪問し、情報交換を行った。熱心な話し合いは辺りが暗くなるまで続いたが、受け入れてくれた支部の方たちは本当にとっても親切で、翌日に支援施設の案内まで同行してくれた。

二月五日。カントー市郊外にある「児童支援施設」は、育児放棄された幼児から機能訓練が難しい重傷者までが暮らす施設で、愛くるしいままざしで見つめる子供たちの中にも手足がなかったり、脳障害のためか床にうごめいてうつろに天井を見ているだけの子供もいて、直視出来ない自分の弱さと、すべての責任を負うべきアメリカと戦争への怒りが体を熱くした。ひとつこい少女に見送られ施設をあとにした一行は、午後から車で二時間程度の距離をベンチエ市へ移動。VAVAベンチエの案内で、被害者の一般家庭を訪問する。

案内してくれた家庭は、幹線道路沿いで比較的きれいな家であった。しかし、家の奥に寝かされていた女性は、現在三五歳。八か月ときに発症したのだという。暑い部屋のベッド上で体をくねらせているだけで、表情を読み取ることは難しかった。メコンデルタと呼ばれる南部の地域は、枯葉剤被害の多かった中部と違い、

被害者の把握や支援の取り組みも遅れているとのことであつたが、VAVAベンチエの案内したこの家庭は、その中でも比較的恵まれた方であると思われる。都市部から外れた農村の被害者の家の多くは、雨風をしのぐだけの粗末な小屋に住む者も多く、援助も届いていないと聞いていたため、おそらくは、われわれ一行を受け入れるにあたり、母親がしつかり受け答え出来るこの家を選んだのだろう。行く方の真意と受ける側の配慮。難しい問題である。

その後、支部の事務所に移って実態を聞く。ベンチエ省の被害者は四、四四四世帯一四、五一六人で、うち約二、〇〇〇人が子供。その中でも、二〇〇世帯は生活困窮者で、両親がすでに死亡していたり高齢となった世帯が多く、二五〇世帯は二人以上の被害者を抱えている。支部の代表の女性は、支援のために先ず家を建て、小さな商売を始められる（ア



ベンチエ VAVAで

ヒルなどの家畜を飼うなど）資金が必要であると我々に訴えた。被害者は二世や三世へも広がっており、ダイオキシンの怖さを教えられた。

二月六日。いよいよ

よ最終日。戦争博物館で、軍事カメラマンが残した様々な写真を見ることが出来た。教科書に載っていた有名な写真もあった。痛みや、ドロの匂い、漂う死臭までもが伝わってくる命を懸けた写真はかりであつた。今回の訪問は、本当に貴重な体験をさせていただいたと思う。

帰国する前夜、ホーチミンシティ郊外にある今回案内してくれたツェットさんの兄弟の家で、家族や友人、親せき三〇人以上が集まり大歓迎を受ける。ベトナム全体に流れる昔の日本の原風景にも似た温かみのある空気につつまれながら、高度成長期を迎えたベトナムが、これからどのように発展していくのか、格差社会にあえぐ先進諸国や中国のようにならないことを祈りつつ、深夜帰国の途に着いた。眠れないエコノミーの席で、私の頭の中を「赤い地のはてにあなたの知らない愛があることを」せつないメロデーが流れた。



少数民族出身高校生へ奨学金を届ける

プート省で奨学金を授与

JVPF副会長 松浦正美

二月三日（月）、四〇名のプート省少数民族高校生に奨学金を贈呈するため「二〇一二冬ベトナム友好訪問団」の一員として同高校を訪問した。

二〇〇八年の夏、奨学金の授与の打合せに訪問して以来、毎年同校を二回訪問している。今回で一〇回目の訪問。

奨学金の授与式は、例年、全校生徒が出席した講堂で行われていたが、今回は講堂を修理していたため、約五〇名程入る会議室で行われた。新たに奨学生となった高校生の民族は、最も多いのは、ムン族だったが、ダオ族やキン族の生徒もいました。

各地から集まった生活習慣の異なる少数民族の生徒達が三年間の同じ寄宿舎で



第5期プート省少数民族高校奨学生達



ニンビンで奨学生たちと

寝食を共にする貴重な経験を十分に生かすようにと思いを込めて奨学金を贈呈した。

（NPO法人ウオーター・ビジョン理事長）

ニンビン省で奨学金授与式

一般社団法人NGO時遊人

本年は第一期奨学生卒業を迎え、二ヶ月の訪問では新たに一五名の支援開始が実現できました。訪問の度に先生方そして生徒達との距離が近付いていることを感じ、また生徒達の自然な笑顔をたくさん見ることができ感動します。特に今訪問では奨学金支援生徒のお父さんとお会いする機会があり、抱擁と握手を交わしました。暖かく、また力強い握手の感触が今なお手に残っている気がします。嬉しかったです。

現地で感じた体験を支援者の皆様に出来る限り伝えるために、気持ちのこもった手紙だけではなく、授与の様子や生徒一人一人のメッセージビデオを生徒達と協力して撮影してまいりました。毎年同じ事を繰り返すのではなく、改善案を常に模索し、より良い奨学金支援制度にしなければと強く感じます。

掲示板

●日越外交関係樹立四十周年の年に、日本とベトナムの詩人による『ベトナム独立・自由・鎮魂・詩集百六十篇』と、グエン・ティ・ビン元副大統領著『家族、仲間、そして国家』の二冊がJVPFの友人の手で出版予定。これは『世界を動かした女性／グエン・ティ・ビン』（平松伴子著）の出版元・コールサック社の代表・鈴木比佐雄さんがベトナムで触れた枯れ葉剤被害者の姿からベトナム人民の苦難の歴史に思いを馳せ鎮魂詩集を思い立ったこと、またベトナム訪問で枯れ葉剤被害者支援の活動に熱心なグエン・ティ・ビン女史に出会ったことなどから実現の運びになったもの。これにはベトナム文学同盟や大阪大学外国語学部ベトナム語専攻の富田健次教授が協力。枯れ葉剤爆弾投下の日（八月十日）に発行予定。

●JVPFは今後三回の友好交流訪問を計画。ご参加募集中。

①13春友好訪問団…五月十八日（予）から、初めて中部高原地帯のバンメトートを訪問。バンメトートで枯れ葉剤被害状況も視察予定。支援継続している北部タイビンリハビリ施設の慰問の他、ホーチミンで村山記念日本語学校修了式、プート省少数民族高校生奨学生卒業式参加も。

これから三年間一生残る人間関係構築の手助けを、初心を忘れずに努めていこうと思います。

②13夏タイビンボランティア…八月十七日（予）から。タイビンの枯れ葉剤リハビリ施設で滞在して障害者との交流を行う。内容は本号参照。詳細は五月ごろ案内。

③13冬友好訪問団…十二月初旬、少数民族高校生奨学金授与と枯れ葉剤被害者支援で計画。詳細は九月ごろ案内。

●さいたまJVPFは、中部・クアンナム省での枯れ葉剤被害者住居支援、貧困地区での医療器具支援で、八月ごろ訪問団を計画。

●広島ベトナム平和友好協会（HVFPF）は、昨年九月、地元産業界、広島大学、広島国際大学、近畿大学工学部など学術界、行政や議会、一般市民など集まり開催された「産学官民交流」広島・ベトナム2012シンポジウム（百三十人余参加）の成功を受け、日越外交関係樹立四十周年記念の訪問団を計画中。

●福岡JVPF支部は、ハノイ大学と提携し「日本ベトナム文化交流センター」を同大学内に。九月ごろ開設を目指す。

●ベトナム農民組合の代表団は昨年十一月訪日の際、JVPFに今後の交流促進について協力を要請。JVPFは各地のJVPF関係者を通じ農業技術交流の提携促進に協力していく。

●村山記念JVPF日本語学校（ホーチミン市）は付設として「留学センター」の開設を準備中。従来の日本語修学高校生支援に加え、日本留学希望者への支援事業を開始する。